

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

舟運・筏・川遊び 堀川のにぎわい

木曾から白鳥へ 木材300日の旅 (下)

⑤ 大川狩 (12～3月)

木曾川合流点に着いた木材は、いよいよ木曾川本流を下ってゆく。

まだ筏に組まず、1本ずつ流す^{くだなが}管流しで錦織 (現:八百津町) の^{あば}綱場 (つなば) まで流下させた。大雨による出水がなく木曾川の流量が安定する12月から翌年3月までに行われたが、厳寒期なので作業を行う日用は大変であった。

小谷狩に比べると川幅は広くなるが、途中には材木が引っかかる岩や乗り上げる瀬もある。岩に木材が引っかかると後続の木材をせき止めて收拾がつかなくなる。日用たちは岩の上で^{のぼりかせ}鳶口を使いスムーズに流れるように誘導したり、登械という柵を設置して防止したりしている。川中の岩場へ行く時や、渦のなかに入って出てこない木材を引き出す時に、日用は小型の筏を使って作業をした。

途中での盗難や他藩領内を流下する時のトラブル防止のために役人が巡回し、たくさんの日用が立ち働く大規模な作業である。

⑥ 錦織綱場と筏組立て (12～3月)

錦織附近の木曾川は、幅が広く穏やかな流れになっている。ここには、上流から流れてくる木材を受け止める綱場が設けられていた。

かずらの蔓をより合わせた直径50cmもの太さの綱5本を、上下2段に組み合わせ、さらに材木で補強し結束したものが川を横断して設けられていた。

管流しで到着した木材は、ここで筏に組み立てられた。長さが4間(7m余)、幅が10尺(3m)が標準的な大きさだった。なお、木曾川は天領である飛騨の木材も筏で流されたが、下麻生(現:川辺町)の綱場で筏に組まれた。

⑦ 筏流し (12～3月)

錦織から2人の筏師が乗りこんで早朝に出発する。しばらく下ると飛騨川が合流し、3人の筏師が乗った天領からの筏が下ってくる。筏は犬山か鵜沼まで運ばれ役人に筏を引き渡して、錦織の筏師は証明書を受け取ってその日のうちに錦織へ帰った。

犬山・鵜沼では筏を2枚連結し、円城寺(現:笠松町)まで1人の筏師が乗り組む。円城寺から白鳥へ直行する筏もあったが、半数は円城寺で円城寺奉行に引き継がれその配下が白鳥へ乗り下げた。

円城寺では6枚から8枚の筏を連結して1人の筏師が乗った筏が、8組集団で白鳥へ向かった。この集団には舟が1隻ずつ付き、途中での宿泊や飲食の用を足していた。木曾川や佐屋川(現:廃川)から筏川や鍋田川を通過して伊勢湾に出るが、その手前の梶島(現:愛西市)に中継ぎ場があり、海に出る前に役人が筏の検査を行った。円城寺から白鳥までの往復は順調に行くと8日ほどだったが、海が荒れた時は2～3日天候待ちで伸びることもあった。

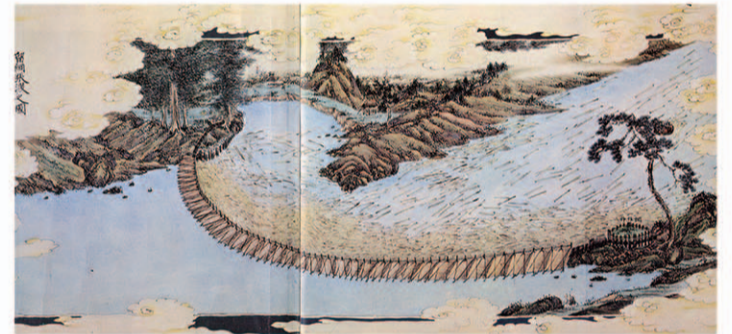
5月に伐採を始めて、約300日の旅で白鳥へと着いたのである。



岩の上で流れてくる木材をさばいている。水際には乗ってきた小筏を係留



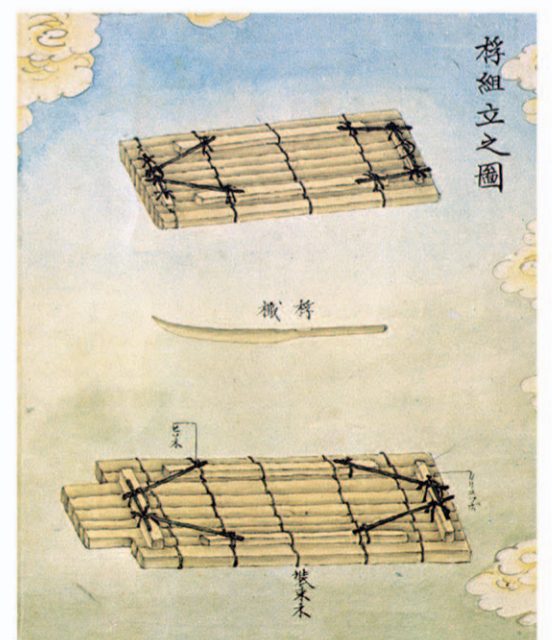
引っかからないための 登械 作業に使う小筏



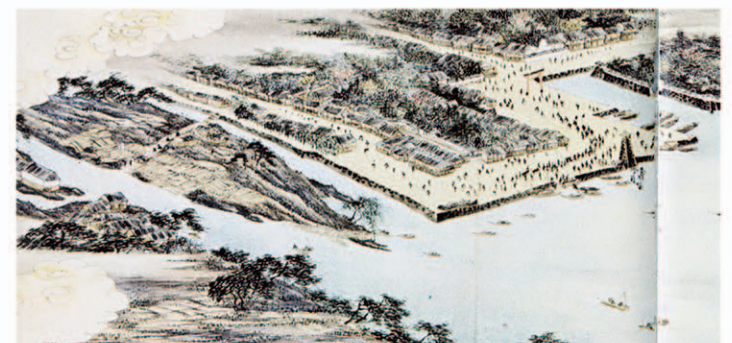
参考:下麻生の綱場



飛騨からの筏



組まれた筏



白鳥へ到着。右下に筏が描かれている